〇読売新聞
　唯一無二の学校づくりのところで、普通科の残り 13 校は、今後取り組みが始まるのか。また、期間はどのくらいかを教えてください。
〇教育長
　唯一無二の学校づくりは、特色ある学校、選ばれる学校への取り組みです。各学校が、その学校ならではの取り組みを磨いています。必ずしも学科やコースをつくる前提ではありません。何をどれだけつくるとか、いつまでにどうするものではなく、唯一無二を考えながら取り組みを進めていくという考えです。

〇読売新聞
　昨年度の「秋選考」の総括をお願いします。
〇教育長
　昨年は、小学校教諭等の人材確保が目的でした。87 名に受験してもらい、一定の効果があったと思います。秋選考までの受験者を含めると、昨年度の受験倍率が小学校教諭等で約 1.5 倍でした。秋選考が人材確保につながる手立てになったと考えています。

〇読売新聞
　1.5 倍というのは、夏選考・秋選考の両方を受けた人をダブルカウントしているのですか。
〇教育長
　夏に不合格でも秋選考に再チャレンジできます。それぞれ応募した人数を分母にしています。

〇時事通信
　例年、外国人生徒の高校進学希望者は何人ぐらいですか。
〇教育長
　昨年は、数名でした。国語の学科試験が、ハードルが高く敬遠されているのではと考え、受験しやすいように変更しました。

〇時事通信
　三養基高校で実施する理由、きっかけは何ですか。
〇教育長
　以前、三養基高校には、国際文化コースを設置していた時期がありました。現在も選択授業に中国語があり、異文化理解に関する教育の下地がある高校です。また、交通の便が良く広範囲から通学しやすいと考えています。
　入学後の日本語の指導、特別な教育課程の編成など、十分な教育体制を確立するため三養基高校を拠点に始めます。

〇時事通信
　ほかの高校にも拡大していく方針はありますか。
〇教育長
　まず、三養基高校でと考えています。日本語指導の人材を確保し体制を確立した上で、社会情勢の変化を考えながら対応していきます。

〇佐賀新聞
　普通科改革の考え方は理解できました。保護者や生徒は、魅力ある学校に楽しいから行きたいと考えても、将来の就職や進学を考えると二の足を踏むのではないかと思います。学校側、教育委員会は、進路に対してのアプローチや目標のようなものがあるのでしょうか。
〇教育長
　生徒の進路選択には、多様なニーズがあります。各学校は、それに合わせて取り組みを進めています。入試も多様化し、学科試験中心の選抜、学校推薦型、総合選抜型などがあります。それらに対応するカリキュラムも考えています。大学の一般選抜への学力をつけて進学するという強みも生かしながら、新たなコースもつくって対応しています。

〇佐賀新聞
　多様な入試の時代になり、その変化に合わせていくのだと思います。教員を配置する際、そのニーズを満たした先生を配置するのでしょうか。
〇教育長
　教員の配置は、全体をみながら適切に配置したいと思います。的確な人事配置に努めます。

〇日経新聞
　唐津西高校に新設された地域探究進学コースに、自治体と企業と連携した課題解決学習を行うとあります。この具体的なものを教えていただきたい。
〇教育長
　地域の方、企業の方、地域づくりの方を含め話し合いをしています。地域の課題を知り、解決したい課題は何かを話し合い、地域のニーズや課題をどうくみ取って学習するのかをこれから具体的に組み立てることになります。それが、子ども食堂になるのかエシカル消費といった環境問題になるかもしれない、様々あると思います。

〇日経新聞
　その場合の学科や指導者をどうイメージされていますか。
〇教育長
　もともと探究学習できるようになっていますので、そういった教員やほかの教員とチー

ムを組んで対応することになると思います。

〇日経新聞
　三養基高校に入学した外国人は、卒業時に高校の普通科の卒業資格が得られます。現在、ウクライナからの避難民や県立高校に通っている外国人が留学生の場合、卒業資格が得られません。その人たちが三養基高校に編入できるなど、卒業資格が得られない人たちに対して窓口が広がるなどのオプションがあるのでしょうか。
〇教育長
　今回は、作文や面接という一定の日本語能力がある方に入学してもらうものをつくりました。留学生の場合、本国の学校との両立があり、対応が難しいところがあります。しかし、今後は問題意識を持ちながら留学生に対する対応を考えていきます。

〇日経新聞
　現在、在学中の人は、日本の高校の卒業資格がもらえる可能性はないのですか。
〇教育長
　現時点では、そこまで考えていません。確かに課題だと思うので、何ができるかを考えたいと思います。